

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 降幡 正志 印

学位申請者 **Wiastiningsih**（ウィアスティニンシー）

論文名 **Translation of cultural and linguistic elements and their influence on literary element in Kawabata Yasunari's Novel *Yukiguni* into Indonesian**

## 【審査の経過と結論】

ウィアスティニンシー氏から博士学位請求論文「Translation of cultural and linguistic elements and their influence on literary element in Kawabata Yasunari's Novel *Yukiguni* into Indonesian」が提出されたことをうけ、2022年9月28日開催の大学院総合国際学研究所教授会にて審査委員会が設置され、審査が開始された。

審査委員会は、降幡正志（本学総合国際学研究所准教授）を主査とし、青山亨（本学総合国際学研究所教授）、友常勉（本学国際日本学研究所教授）、野平宗弘（本学総合国際学研究所准教授）、加藤久典（外部委員：中央大学総合政策学部教授）の計5名の委員から構成された。

各審査委員による論文の審査および2022年10月25日に実施された最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

## 【論文の概要】

本論文の目的は、日本文学作品をインドネシア語に翻訳する過程において、日本語や日本文化をいかに理解し翻訳に生かすべきかを、川端康成『雪国』及びそのインドネシア語訳の分析を通じて論じることにある。

本論文の構成は以下の通りである。

- Chapter 1 Introduction
- Chapter 2 Translation analysis of abstract cultures
- Chapter 3 Translation analysis of concrete cultures
- Chapter 4 Translation of personal pronoun of the main characters and the

## Chapter 5 Conclusion and Suggestion

第1章では、まず研究背景として、B. アンダーソン『想像の共同体』や夏目漱石の文学作品などの翻訳に関する種々の言及を取り上げ、本論文で分析対象とする『雪国』翻訳版について説明している。なお、『雪国』のインドネシア語訳には、英語訳を通じた翻訳（以下「間接訳」）と日本語からの翻訳（以下「直接訳」）の2種類が存在し、本論文ではこの両者の綿密な分析が軸となる。続いて、本論文の分析の基盤となる理論的枠組について言及した。また、人称代名詞が分析の主たる対象のひとつとなるため、日本語とインドネシア語の人称代名詞について、さらにはインドネシア語には見られない言語現象である敬語体系について説明する。それらを踏まえた上で先行研究を捉え直し、本研究の位置づけを確認している。

第2章では、抽象的文化の翻訳に関する分析について論じている。分析の事例として「数」、とりわけ年齢や度量衡、芸者の収入をまず取り上げている。年齢に関しては、間接訳と直接訳との間に見られる違いが「数え年」を考慮に入れるか否かによるもので、翻訳に際しては文化的な背景を踏まえること、さらには年齢に関する法律なども視野に入れる必要があると論じている。度量衡に関しては、文化により異なる単位をそのまま換算すると小数点を使用することになり文学的価値を損なうことにつながることを指摘している。芸者の収入については、金銭とは異なる支払い方法が原作では述べられており、翻訳する際に読者が具体的なイメージを持つことができる表現を用いているかどうか翻訳者の力量にかかってくると指摘している。抽象的な文化の他の要素として「職業」「街並み」「鉄道」「習慣」「伝統的歌謡」「敬称」「陰陽」を取り上げ、個々に論を展開している。適当な訳語が見当たらない場合に、従来から論じられている「適応(adaptation)」や「借用(borrowing)」などの手法とは異なる形で、すでにインドネシア語内で定着している借用語を翻訳に用いる手法が本研究で確認され、「内部借用法(internal borrowing)」と呼ぶこととした。

第3章は、具体的文化の翻訳に関する分析である。具体的な事物、とりわけ「植物」「芸者関連」「家屋・家財道具」「衣服」「食物」「宗教・信仰関連」「場所」について、間接訳と直接訳の双方を詳細に検討した。上述の分野における対象の語句が合計で79件見つかったが、間接訳と直接訳とで用いられている手法の分布が異なり、例えば「借用」は直接訳に多く見られるのに対し「適応」は間接訳に多く見られた。また間接訳では「省略(omission)」も少なからず確認された。さらには「内部借用法」も間接訳・直接訳ともに用いられていた。本章では、

用いられる手法が日本語からの直接の翻訳か、英語を通じた間接的な翻訳かにより異なりうることを、分析から明らかとなった。

第4章は、主要な登場人物の使用する人称代名詞がいかに関係され、それらが互いの人間関係の描写にいかに関係するかを論じている。インドネシア語では、1人称と2人称の代名詞が親しい関係か否かにより使い分けられる。間接訳ではその使い分けがほとんど見られなかったのに対し、直接訳では初めのうちは距離感のある代名詞が使用されていたが、物語の進行とともに親しい関係で用いる代名詞へと変化していることが確認された。直接訳における人称代名詞のこのような使い分けは、日本語で人称代名詞や敬語を用いることによって表される人間関係を描き出すことに成功しているといえる。一方、間接訳では英語の I や you を翻訳することになるため、人称詞使用のバリエーションが見られず、結果として登場人物の人間関係を表すには至っていない。人称代名詞の使い分けが登場人物相互の人間関係の遠近を描くのに大きく役立つことは想像できるが、本研究において間接訳と直接訳を比較することで明確化された。

第5章では、第2章から第4章までの分析に基づく結論を述べている。本研究の結論として、(1) 数字や数量に関して単位や計算方法など文化的な背景を考慮し、かつ読者に受け入れられやすい翻訳が必要となる、(2) 抽象的文化・具体的文化のいずれにおいても、従来論じられてきた手法の他に「内部借用法」という翻訳手法がある、(3) 人称代名詞の使い分けが登場人物の人間関係を描写するのに効果的な役割を持つ、の3点を特に重要な論点として挙げている。最後に、こうした知見は翻訳のみならず語学教育にも応用できるということを、提案として述べている。

### 【最終審査の概要】

最終審査は2022年10月25日17:00～19:00に実施された。まず学位申請者が約30分で論文の概要を説明し、その後各審査委員との質疑応答が行われた。また各委員から論文に対するコメントも何点か述べられた。

本論文の内容について審査委員が高く評価できるとした点には以下のようなものがある。

- (1) 1つの文学作品のみを分析の対象としているものの、原作及びその間接訳と直接訳を非常に詳細に検討し分析を進めており、その中から得られた結論には強い説得力がある。
- (2) 翻訳は単なる言語の置き換えではなく、原作の背景にある文化的背景なども深く視野に入れるべき困難な作業であるが、本研究は翻訳の実践に有効なス

トラテジーを示したといえる。

- (3) 本研究の本来の目的ではないが、原作では当たり前に読む（あるいは読み飛ばす）ような箇所を、翻訳を通じることで注目することにもつながり、翻訳が作者の意図を再認識させうるという可能性を提示することとなった。

一方で、以下のような点が改善すべき点あるいはさらなる検討を要する点として指摘された。

- (1) 日本に独特な文化と述べているものが必ずしも日本独特ではなく、より広く東アジアにも見られることもあるなど、より巨視的な視点が必要と思われる点があった。
- (2) 今回の分析は具体的・抽象的事物や数字といった、いわば名詞や数詞に限定されていたが、動作（動詞）や状態（形容詞）の分析も必要と思われる。
- (3) 人間関係を示す方策として、人称代名詞の使い分けだけでなく、日本語の敬語使用やジェンダーによる表現の使い分け、終助詞の使用などが翻訳にどのように反映されるかという分析も必要になる。
- (4) 間接訳と直接訳との間で翻訳手法の出現数の分布が異なる点について、一歩踏み込んだ考察があるとよかった。
- (5) インドネシア語の文法的な現象について目配りが足りない点が若干見受けられた。

上述の指摘の他、質疑応答では日本やインドネシアの文化についてどのように解釈するか、どのように翻訳に生かすか、あるいはどのような点に注意すべきかといった質問が複数の委員からなされた。文化そのものについては本研究の目的からは外れるが常に意識しておく必要があるとのコメントもなされた。

これらのコメントや質問に対し、学位申請者の応答は本論文で明らかにされた点やその限界、今後の課題とすべき点を踏まえた的確なものであった。審査委員からの指摘は、本論文の学術的な価値を大いに認識した上で今後の研究の広がりの可能性を示したものである。

以上、論文および最終試験の審査により、審査委員会は本論文が本学総合国際学研究科博士学位論文評価基準を満たしていることを確認し、全員一致で学位申請者ウィアスティニンシー氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であることを判断した。